

# 末黒野

すぐろの

9月号 (通巻781号)



# 木 苺

小川玉泉

雲を脱ぐ那須岳群るる岩燕

桜の実屋根打つ音の更けにけり

米を研ぐ手元を染めぬ梅雨夕焼

摘まむとて触れし木苺こぼれけり

鯉の背の分け入る蓮の浮葉かな  
雨水に乗りて下水へ松の花  
郷愁や風にさやげる麦畑  
麦秋の夕焼この身小さくなり  
初生りや親指ほどに茄子の紺  
三門に醒むる仏心ほととぎす  
柏槇の洞に憩へり揚羽蝶  
まひまひや静まりかへる山の池

# 天声人語

松本三千夫

石抱く根上がり松や安居寺  
草はらを海の風這ふ葉の日  
群れてよし一輪でよし虞美人草  
吹かれては鳥こゑこぼす今年竹  
寝そびれて厠に立つやほととぎす  
追伸に一句を添へて明易し  
味読せる天声人語さくらんぼ  
波のごとき竹の葉擦れや五月闇  
グラビアを風のなぶれり夏座敷  
拾ひ読む徒然草や梅雨の底  
朝焼やはや亀のゐる池の石  
若者の路上ライブや梅雨の月

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 遠郭公

大橋伊佐子

花桐の里むらさきに薄暮かな  
つぎ分くる新茶幸せ分かつごと  
濡れ傘の匂ふ卯の花腐しかな  
遠つ嶺の映りて澄める代田かな  
雨気はらむ出湯の里や朴の花  
明け初むる蒼き湖畔や時鳥  
溪川の激つ白さや遠郭公  
緑陰の木洩れ日跳ねて踊るかに  
枇杷熟れてうすき日ざしの連子窓  
婚礼の遠き昔や夏座敷

## 横浜空襲五月二十九日

小野口正江



新緑の森に逃がれし彼の日かな  
梅雨入りや空襲の日は蒼き空  
空襲に逃がれし丘や合歓の花  
薔薇切つて指に棘刺す開港日  
夏野菜籠一杯に亡夫の友  
老鶯の谷渡りなり父母の墓  
冷麦を温めひとりや雨催  
畏友より久の便りや螢の夜  
水揚げのよくて二週目濃あぢさゐ  
夫たちの特攻の碑や卯波立つ

## 松落葉

清海信子

看取り無き一と日の病臥走り梅雨  
夕涼や検査疲れにまどろみぬ  
水盤に塵を浮かべて病みぬたり  
紫陽花の毬のなだるる破れ垣  
萍に雨太宰忌の夕ごころ  
水中花は退屈な花雨続く  
夕餉にと水に浮かせて茗荷の子  
冷奴象牙の箸の重たかり  
止みかけて又降る雨や大でまり  
ことごとく気弱となりぬ松落葉

## 花蜜柑

黒滝志麻子

小さき手をはみ出して受く柏餅  
夕暮れの里の明るし桐の花  
海と空ひといろの碧花蜜柑  
街道へ水打つ朝の旅籠かな  
夏霧や声明洩るる修験道  
藍染の布干す庭や青葉風  
庵の戸揺れんばかりに行々子  
牛蛙包みこみたる闇夜かな  
遠山に虹かかりたる今日の幸  
小包の立方体は新茶かな

# 乙矢集

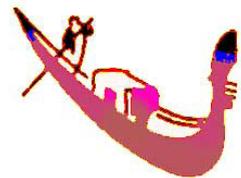
配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

鐘 供 養 加藤 静 江

一山に声明ひびき鐘供養  
**木洩日や滝を離れて滝の音**  
園に充つる幼らの声五月来ぬ  
賑はへる落書広場風薫る  
城跡の濠の明るく竹落葉  
梅雨入や浮世絵展の賑はへり  
八つ橋の影濃くなりぬ菖蒲園

薫 風 菅野 日出子

初ものと焼竹の子を山の宿  
蹲踞の水の清らや今年竹  
薫風の通ふ茶室や句座開き  
雨よけの傘や牡丹の崩れそむ  
行き過ぎて忍冬と知る四ツ目垣  
梅の実の落ちてはづんで男坂  
古書店へなに買ふでなし青時雨



折鶴 菅野蒔子

花 茨

熊切光子

終点はまだ先糸瓜苗植うる  
余震あと野菜花苗分け合へり  
ほぐれゆく飛行機雲や閑古鳥  
里青葉仮設住宅この地にも  
慰霊の鶴折る指先や梅雨じめり  
おもいつきり晴れいつまでも昏れぬ夏至  
夏至や今日三十三度超へ暮るる

**余花に逢ふ湖見ゆるまで登り来て**  
雨来るかさざめき止まぬ夜の新樹  
林中の鳥声しきり花うばら  
こぼれ次ぐ忍冬の香や磨崖仏  
昼顔や人に語れぬこと増えて  
老鶯の声よく透り山の晴れ  
穀倉に夕日とどまり青葉木菟

豆の飯 城戸 緑

山 藤 堺 昌子

尾根径は風の廻廊五月来る  
五月晴翼広ぐる城の樹々  
巨船着く噴水の秀の咲き揃ひ  
墓石は聖書の容風薫る  
との曇る空に溶けゆく花樽  
**子の炊ぐ退院の日の豆の飯**  
身辺の整理ほどほど更衣

足跡の残る植田のそよぎかな  
若鮎のかんばしき香を食うべけり  
夕照の山藤懸かる高さかな  
畦道を彩る風のひめぢよをん  
玫瑰の花の小径や波の綺羅  
先触れの太鼓近づく神輿渡御  
ひと群の浜屋顔や空碧き

# 万 仞 集

遠雷や常に遅延のバスを待つ	雨音を傘に遊ばせ濃あぢさゐ	マネキンの担がれて行く街薄暑	木苳を摘みて遅るる岨の径	田植待つ一村閑と鎮もれる	入れ替はり鏡に写す夏帽子	蓋とるや柳川鍋の牛蒡の香	馬鈴薯の花より明けぬアイヌ村	露ごめの大和三山桐の花	茹でし露放てる水に透くみどり
嵐 弥生	高橋 明	倉橋千代子	亀卦川菊枝	伊藤由良	加藤八重子	波多野孝枝	外山節子	河合とき	有賀鈴乃

露座仏の指ふくよかやてんと虫	饗庭恵子
竿振りて幼に負けず梅落す	立野千鶴子
雨あとの照る日をかへし花石榴	田村加代
手に慣れし湯呑みを磨き新茶汲む	脇澤久子
母の日や長子の作る手打そば	今泉あさ子
萍や捨田のいつか沼のごと	鍋島武彦
地震の句を読めば涙や梅雨来たる	高橋美恵
古日記棄つるに惜しや紙魚走る	三橋玲子
下町や一鉢づつの夏野菜	青木由芙
座布団置く駅の待合麦の秋	前原マチ

# 巨林抄

夏蝶を待つかに置かれ籐寝椅子	蒙古斑なでて嬰兒の更衣	新緑の森迫り出すや海の上	たかし忌をまたず牡丹崩れそむ	夏の湖宿のうしろは天下の嶮	紫陽花の白にはじまる旅路かな	身の丈の日々の暮しや水馬	節電と書ききたる団扇京老舗	夏の朝禽舎の如き寺の森	石垣は野づら積みてふ城涼し	記念艦三笠の艦首風青し	天道虫星をこぼして飛びにけり
正谷民夫	都留百太郎	山田本女	新谷フクエ	吉田美智子	山本茂子	芝田幸恵	浅岡麻實	中村高也	澤田澄子	小野弘正	宮地静雄